

## YV ギアナ高地の旅の一こま

東條純一 JH3AEF

ブラジルとの国境の町サンタエレナはサバンナ地帯から少し高度を上げた、なだらかな山間の町である。国境の町といっても何等それらしいものがあるわけでもない。人口も一万そここの質素なたたずまいである。むしろアドベンチャラスな旅を求める旅行者にとってのみ旅の要衝の一つに数えられているのかもしれない。(Fig. 1)

すなわちイギリスの作家アーサー・コナン・ドイルの冒険小説「失われた世界」で有名になったギアナ高地、なかでもロライマ山(Fig.2)へのトレッキングツアーの出発点の一つがここサンタエレナであり、おおむね五泊六日、六泊七日の行程だそうである。毎日ツアー会社に応募してきた員数が揃えば催行が決まるといふシステムが一般的で、各国からの混成部隊となるのが普通ようだ。勿論、ガイドにポーターもつぐが全てテント泊まりの自炊である。我々のドライバー氏はガイドの資格もあり、我々のあと、JAからの六人パーティーを率いて登頂のSKDとなっているとか。

俺ももう一寸若い頃に時間を作っていたらなー！！

あまり外人と話す機会が多い私でもないが、「あんた一体何時、何歳になったらリタイアしますねん？」と真面目に聞かれたことが幾度もあった。この点では全く返す言葉の無い私、いや日本人と言っておかろうか。

いやいや日本人にも、いや我がクラブにもA級OPレーターと呼ばれる凄い師匠もおられるのだから、これは個人の資質によるところが大きいのかなあ??

更に旅行者が目指すもう一つの対象は世界最大の落差をほこるエンジェルフォール(Fig.3)である。このサンタエレナは、この滝探検の基地となるカナイマへの中継点にもあたるのだ。

私が今、このサンタエレナにいるのも正にこの二つの名勝をこの目で確かめんがためである。思えば大変なアプローチであった。成田からW,ダラスで乗り継いでカリブ海を南下、ベネズエラ(YV)の首都カラカスに、更に国内線に乗り継いでYVの中部にあるシウダボリバルに到着、ようやく地上の人となる。これより以南はおよそ都市と呼ばれるようなものはなく、広漠たるサバンナとそれに続くジャングルがブラジルのアマゾン河流域まで広がっているのだ。

空路の後、我々は二台のランクルに分乗して南下することになる。ここからは二日にわたるサバンナドライブが始まるのだ。(Fig.4)

シウダボリバル市街を過ぎるとすぐさまサバンナに入り見渡す限り緑一色、だがそれは近づいて良く見ると牧草地のようなソフトな感じのものではなく刺々しい背の低い灌木であったり、ススキのような乾いた雑草であったり、遠目には鎮守の森を思わせる小規模な雑木林がちらばっていたりで、行けども行けども、そして波のようにゆっくりとした起伏を繰り返すこの風景はしばらくすると退屈してしまうほどの単調さでもあった。



Fig.1



Fig.2 ロライマ山

ドライバー氏、どうか居眠りをしないで、、、今走っているこの道路、国道10号線は余り詳細な地図でなくてもYVを南北に貫き、国境を越えブラジルにまでずっと延びている国際幹線道路なのだ。



Fig.3a エンジェルフォール



Fig.4 ランクル

YV側は完全舗装されてからまだ何年も経たないと聞くが、所々に検問所があり 都市部では片側二車線、中央にも三、四車線も作れそうな広いスペースが確保されていた。人影が途切れると数時間も走らねば人にも給油にも 食事にもありつけない。その間は全く人工物、ましてや人家らしきものは見当たらない。数時間ぶりにたどり着いたドライブイン？ 中継点の言葉のほうが適切かも、お世辞にもレストランとは言い難いが飯を食わせるシステムにはなっている。屋根はトタンだけの所も多く(Fig. 5)、壁や窓はなく風が吹き抜ける状況である。肉を焼いているのも、鍋をかき混ぜているのもまじかで見ながら皿のものをいただく。一寸油断するとハエが、、、。長テーブルの向かいに座るのは現地人の子供ずれであったり 見るからに屈強なトレーラーの運転手であったり 足元にはこの場所にいついた犬であるう 数匹がいかにも栄養良さそうに何食わぬ顔で闊歩していた。何等取り繕うところの無い日常が悠々と流れているといった感じ、そしてまたの中継所も同じような風景であった。

さて国境の町サンタエレナからロライマ山へ。最近テレビにも登場しその秘境度は昔ほどでもなくなったが、JAの旅行会社はこぞって秘境ギアナ高地とか旅の難易度5とかうたっている。YVの南東端をしめ、ロライマ山やエンジェルフォールの名勝を擁するこの高地一帯の名称である。他にもない、この地をこれほどまでに秘境と呼ぼせるのは如何にも奇妙な地形、巨大なテーブルマウンテン(タイプイ)(Fig.6)の存在である。数にして100以上もあり 中には確かな登頂の記録のないものもあるという その景観を言葉にあらわすのは甚だ困難であるが、近い表現はサバンナやジャングルの中に巨大な石油タンクを置いたような感じとでも云おうか。その立ち上がりはいずれもほぼ垂直で数百~千メートル(Fig.7)、上面はほぼ平らになっており 広さは大きなものは東京ドーム6000ヶが入るものもあるという 薄暮にサバンナを見渡すとまるで石油タンクが散在するがごとき有様である。

この切り立った数百メートル~千メートルにも及ぶ、そして、草木の付着をも許さない硬い岩盤の側壁が下の世界と上の世界を隔絶し、タイプイ上での動植物の進化は地上のそれとは全く違った進化を遂げてきたということである。

またこの地域、特にロライマ山頂にはYV, 8R, PYの 三ヶ国の国境が置かれており 政治的にもデリケートな地域でもあるらしい。ここでまたアーサー・コナン・ドイルのお話を少々、勿論誰もが知るイギリスの小説家、一連のシャーロックホームズものは知らぬ人が無いほどに有名であるが、彼はもともと町医者であったという それがかんがはず、暇にあかして小説を書き始めたのが大当たり、彼は運が良かった、俺には文才もない、、、

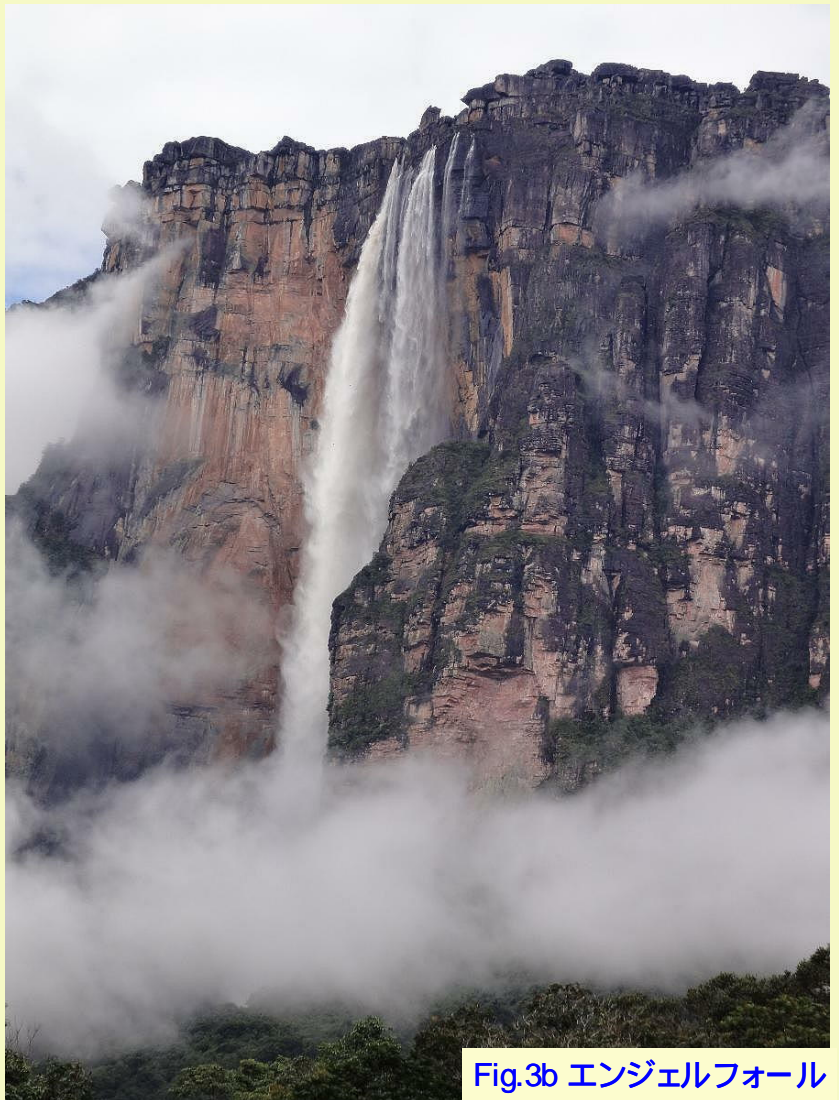


Fig.3b エンジェルフォール



Fig.5 幹線道の中継所



Fig.7 テイプイ側壁



Fig.6 テイプイ

さて、シャーロックホームズもの間に執筆されたのがこの「失われた世界」であり1911年のことである。何と既に100年もの歳月が経つことになるが、この冒険小説の舞台はまさにこのロライマ山であるといわれている。恐らくドイルは当時の探検家の記録をもとに彼が興味をもつ古生代の生き物を取り入れてSF的にこの小説を書き上げたのであろう

なかでもロライマ山へのアプローチには実に説得力があり興味を引いたので少しそのことについて書くことにした。彼等はアマゾン河河口から蒸気船で同河の中流にあるマナウスまで1500Kmを遡行している。マナウスは現在もアマゾン河流域きっての交通、物流の要衝である。更に4日、同じく蒸気船でアマゾン本流を遡行、初めて支流に入り、ついでこの蒸気船で遡行、そこから上流は現地調達のカヌーで遡行すること2日間。以後は徒歩9日をかけてようやくロライマ山の麓に到達したのであった。マナウスからだけでも17日もかかったことが文面からは読み取れる。

今回我々は全く逆サイトの北または北西からロライマ山を目指したことになるが、たった国内線空路1時間と2日間のランクルドライブで麓に到達。当時は北からのアプローチは到底無理で、いきおい水路が頼りのアマゾン経由とならざるを得なかったのであろう。それにしても100年の時の流れは善しにつけ悪しきにつけこれほど大きく人の世を変えるものだということを改めて実感した次第である。

さて我々の物見遊山ツアーではヘリコプターを使って登頂する。当日起床、即、空を見上げた。なんだかどんより曇っているようだ。おまけに霧も漂っている。半分諦めに似た気持ちでヘリ会社の事務所を訪ねる。事務所はこじんまり ラウンジを兼ねた一室だけ。客も我々だけ。目の前の草原にヘリが二機(Fig.8)座っていた。我々は3人、3人の二班にわかれ、私は前組であった。

曰く、天候が回復しなければ飛びませんし、途中で急変すれば引き返します。条件によっては頂上に着陸できません。頂上での滞在時間も条件次第です。前組が飛んでも後組が飛べないこともあります。トホホ、、、キビシイ、、、いずれもごもっともなお話、ただ「はい」「はい」だけなげに待つしかない。

これ等の情報を我々に伝えるのは現地人らしい若い男。もう1人かなり年配で色物のカッターシャツに長めのショーツ、ロマンスグレーのおじさんがさかんに入り口を出たり入ったり、後で判ったことだが彼がパイロットであった。天候の具合をみているのだ。私の目には未だ雲が低くまで垂れ込めた曇天に見えるのだが、いよいよ離陸するらしい。二人の動きが急に忙しくなり、3名は機上の人となった。私はヘリは初めてである。もっとやかましくて振動のひどい乗り物かと思いきや、案外静かで振動も不愉快に感じるほどでない。ローターの回転が上がりパワーっと垂直に約10m程上昇。それから斜め前上方に急速に高度を上げていく。町外れにある発着場からすぐさまサバンナ上空に、突然何も見えず気が変になるような真っ白い雲の間を突き抜けるとワーオ！あっちにもこっちにもテーブル状のタイプイが雲の下からニョッキ姿を現しダイナミックな視界が開けた。上空にはつす雲が広がっているもののタイプイを眺めるには何の支障も無い。サバンナ上空にはごく低い所に雲海ができていてこれまた幻想的である。

視界が開けて以来、ヘリは常に一つのタイプイを指して飛んでいる。これがロライマ山であることは明らかだ。大きく見えているが距離があるのであろう。なかなか近付かない。その間にも小型のタイプイ、背の低いタイプイは次々と後ろに遠ざかってゆく。40分も飛んだ頃タイプイの構造が次第に明瞭に見えるようになってきた。確かに側面は垂直で岩盤、草木が繁ることは到底不可能に見える。しかし、その側壁にも色々な変化があり上から下までそぎ落としたように一枚のところもあり、二段三段と細い緑のバントを擁する部分もある。壁面を幾すじもの滝が流れ落ちているのも確認できる。エンジェルフォールと言わずとも、タイプイから流れ落ちる滝はいたる所に数多く見られ、その姿かたちも様々である。二条になって落ちるもの、三条になって落ちるもの、側壁の途中から落ち始めるもの、やや下の方の緑の間を急流となって駆け落ちるもの、我々日本人の滝のイメージからはかけ離れた珍しい光景である(Fig.9)。

ようやくロライマ山の直前に到達した。タイプイの上端(頂上)より少し低い高さをルートを選ぶように側壁と一定の距離をおいて飛行を続ける。しばらくしてある点まで来ると前進を止めホバリング状態と思いきや、いきなり高度を上げてタイプイの上面より更に20-30m上に競り上がる。とたんに強い横風を受けユラリユラリ、少し機首を下げるような態勢で力強く前進を始める。何事も無かったようにタイプイの上空、といってもすれすれを二回三回と旋回する。着地点を探しているのであろう。ひさしのようにとび出した岩陰に黄色や赤の登山着姿のクライマーが手を振るのが見える。年間2-300人の登山者がいると聞いたが彼らもまた選ばれた人達なのであろう。無事を祈る。

タイプイの頂上はほぼ真平いら、所々にニギニギと奇怪な形をした岩が頭をもちたげる。少し岩陰になった平らで、生えている植物の少なく砂地に見える所に着陸する。砂埃が上がるのかと思いきや何事も無くいたって穏やかにランディングした。(Fig.10)



Fig.8 ヘリコプター



Fig.9 滝



Fig.10 ロライマ山頂にて



Fig.11 タイプイ上の植物

憧れのロライマ山頂に記念すべき第一歩をしるす。20数億年前、地球上の大地が一つであった頃から、このあたりの大地は動くことなくこの地に踏み止まったとか、以来、天変地異にさらされ続けて軟らかい部分がそぎ落とされて現在のタイプイが形作られて来たとか、そんな大それた所にAEFは立っているのか。

AEFには現実の2800m高の冷たい風と気温の方が余程身にこたえるのだが。

地面はすべからく岩盤に見え、所々に清らかな砂が堆積しているように見える。表面は全てのものがしっとりど湿っていて、あちこちの窪地には清らかな水が溜まっている。土とか泥とか云う感じのものが見当たらない。堆積した砂の上や岩の割れ目から植物が生えているように見える。あちこちに奇怪な形をした岩が突起するのは見えるが見渡す限り平坦で航空母艦の甲板のような感じでもある。時々霧が辺りを包み視界が悪くなる。そのため植物の表面には細かい露が消えることなく付いている。この頂上(余りにも平坦で頂上という言葉がそくわないが)の何処かには、ドイツの小説以外にもこのタイプイの存在を知らしめた鉱山師の飛行機墜落現場の碑やYV, 8R, PY三国国境線などメモリアルなスポットもあるのであろうが、あたりは広大であるえう滞在時間は余りにも短く、ゆっくり巡れる状況になかった。この低温では解説書にある珍種の動物や昆虫の観察もできそうに無い。ただ、足元には多数の植物がみられるが灌木といえるような背の高い植物はこの辺りには全く見当たらない。この地に特有な植物の知識の全く無い私にとっては何の解説を加えることもできないが、有史以前から下界とは全く隔絶され独自の進化を遂げてきたタイプイ上の植物は多くはパイナップル系の植物であり、大地に根を張って栄養分を吸収することが極めて困難な環境ゆえ、小昆虫を捕食する食虫植物が多数生育しているという。しかし、我々にはそれを見つけることすら出来ずじまいだった。云われてみればパイナップル系の植物かなあと思われるものはそこかしこに見られた。(Fig. 11)

3~40分の滞在の時間は瞬間に過ぎてしまった。帰路、へりはタイプイ上空に舞い上がると一直線にへりポートへと向かった。空から見るサバンナは太陽に照らされてしっかりした陰影を映し、あたかも大木の枝や幹のようにガリーが集まり谷になり、谷々が集まり小川となり、小川は集まり河となり、サバンナの中を大きく蛇行しながら遙か彼方の霞の中に溶け込んでゆく(Fig. 12)。蛇行した川の一部は三日月状に分離して湖を形成しているところがあり、湿地をなすところもある。全く人の手の加わらない自然とはかくも壮大で美しいものなのか。

後続隊も無事登頂に成功し、この日の午後、二機のセスナに乗り換えて、いよいよエンジェルフォールの落ちるアウヤンタイプイ(ギヤナ高地で最大のタイプイ)の麓にあるカナイマ国立公園に移動することとなる。これから先3日間の行程は全てセスナ機になるため(Fig. 13)、必要品は最小限にまとめアタックザックに詰めていくことになる。ジャングルウオークに川の渡渉にと少々オーバーな説明書となめてかかっていたふしはあるが、実際、ここまでやるかと驚いた。原住民の村落訪問でセスナが下りたのはジャングルの中の小さな草地、オーバーランしたらジャングルに突っ込みます。こわいです。セスナ二機はそこで羽根を休める間、我々は原住民に先導されてジャングルの中を右往左往、彼らは早い、いよいよ滝見物、川の中をジャブジャブ、向こう岸に渡り、またこちら岸に、ついに彼らは深そうな流れの中に頭から飛び込んで泳いでいく。我々には川岸に張ったロープを指してそれを伝えておいでとか。確かにカメラ、ビデオはぬれぬいよう対策を、水着もありとか説明には書いてあったがここまでやるか。全く背が立たない、頼るはロープのみ。

JAなら遠の昔に危険につき催行中止のお達しがでてもおかしくないなあ!

この原住民の村で大発見。村には5戸の茅葺の住居があったが、住居の中ほどの広場に材木のポールが、そしてそのてっぺんにはV ANTらしきものが、いやあれは間違いなくV ANTだ(Fig. 14)。エレメントからみて40mバンド? エレメントがポールに巻きつき気に入らないが同軸ケーブルの引き込まれている先をたどる。住人を驚かさないうように出来る限りの笑みを浮かべてそっと中を覗く。父親と小さな娘だろう、薄暗い部屋の中で談笑していたらしい。その傍にRigのあるのがはっきり見て取れる。



Fig.12 ガリー、小川、河、サバンナ



Fig.13 セスナ



Fig.14 V ANT

笑みを忘れず「ハイ」ハポネス、トジョー」  
 アー良かった。彼もニコニコしている。何と無く握手した。原住民はみな小柄だ。手はごっつい。RIGを指差して「RAIDIO,RADIO」と云ったら意が通じたらしくSWをポンと入れた。Fは現われてこなかった。CH式なのか。

驚いた。ICOM製ではないか。IC-58 (Fig.15) と記されている。信号は受かってこなかった。しめた、これこれとポツェからICOMのRIGと自分が写った写真入りハム用の名刺を差し出して「MI RADIO OPR」と胸をはった。喜んだのは彼のほうハポネス、ハポネス ICOM ICOM」とRIGを指しながら大声で答えた。何語とも言えない会話ながら、役所と軍の用件と緊急時に使うこと、6MHz台での運用であること、電源はソーラーか発電機からバッテリーをとって使っていることなどの情報が得られた。ほんの10分ほどの会話であったが親しみを感ずけたのか、セスナが離陸する時には傍まで来て手を振ってくれた。ほかの村でも同様のANTとRIGが設置されているのを確認した。ここでも「ハイ、ハポネス トジョー RADIO OPR」はなかなか効果的であった。やはりCOMのTRXであった。ICOMさんもなかなかやるじゃん。

全く関係も無い家にズカズカと入って行って言葉も判らぬのにベチャベチャ喋って来るは、写真といえば人の写真は全く取らず、地べたに這いつくばって昆虫やら植物の写真(Fig.16)ばかり撮っているものだから、パーティーの皆さんからは変わり者の変なジーサンのレッテルを貼られてしまった。そりゃーそうかも、こんなサイケデリックな旅に応募してくるのは全国からほんのわずか。彼等もまた相当サイケがかった20,30,40才台の若者ばかり、サイケな息子、娘の世代と冒険旅行するのもしつまで出来ることやら。

もう一つ珍しい写真をお見せしましょう。このあたりに生息する大蛇、アナコンダの剥製がキャンプのラウンジの壁に飾られていた(Fig.17)。このキャンプを創設時、先代が射止めたとの説明をうけた。10m近くあるように見えた。また、我々をガイドした現地のコンダクターは昨年の乾季、このキャンプのすぐ近くで撮影したというアナコンダのビデオを披露してくれた。鹿のような四足の動物の腹に3回ほど巻きついて締め上げているシーンであった。動いているビデオの映像は剥製にも増して恐ろしいものであった。乾季には水を求めて川岸に下りてくる獣たちを待ちうけて襲うのだと笑いながら言っていた。

そんな川を平気で渡らせるとは、

2011年 8月



Fig.15 Rig



Fig.16a 昆虫など



Fig.17 アナコンダの剥製

Fig. 16b



# 第39回SEANETコンベンション in Brunei 速報 (その1)

(2013年には再び日本で開催予定)

JA3AER 荒川泰蔵



今年のSEANETコンベンションは2011年11月17日から5日間、ブルネイ・ダルサラーム国の首都バンダル・スリベガワンのセンターポイントホテルを会場に、BDARA (Brunei Darussalam Amateur Radio Association) が主催して開かれた(写真1)。当ラジオクラブからはJK3IYB西さんと、JE3BEQ宮本さん、それに私の3名が参加したが、クラブとしては過去になく少人数であった。宮本さんは単独で香港を経由してブルネイ入りされたが、私は西さん他、JO3TIC新開さんとJA5EVQ湯さんの4人で11月16日に関西国際空港を出発し、フライトの関係でシンガポールに一泊した(写真2)。シンガポールでは空港に直結したCrowne Plaza Hotelに投宿したが(写真3)、ホテルまで訪ねて来てくれた9V1UU佐藤さんと夕食を共にしながらシンガポールの近況を伺った(写真4)。翌朝、羽田からの便で早朝にシンガポールに着かれた7K3EOP戸倉さん、JF1WMY染谷さん、JL1XWR井上さん、JA9AG、JA9JYL吉井さんご夫妻と合流し、ブルネイへ到着したが、空港ではV85TL、Tamatさん、V85CB、Wahabさん、V85AV、Aliさん、V85AM、Norsukimanなど大勢の人達が出迎えてくれた(写真5)。V85AJK、Jamalさん達は顔が利くのかイミグレーションや税関の中まで来ていて、入国審査や通関の手続きなどを手伝ってくれたので、我々にとってはフリーパスの感じであった。日本からの参加者の他、昨年上海で会った中国からの参加者とも合流してマイクロバスで会場となるホテルに向かったが、ホテルでも多くのメンバーが出迎えてくれた(写真6)。コンベンションの参加費500米ドルを支払うと、プログラムの他、お揃いのジャケットやリュックサックなどを渡してくれたが、V85AHV、Aidahさん、V85CQ、Ernieさん、V85AWJ、Noorhaytiさん達女性陣がてきぱきとさばっていた(写真7)。



写真 2



写真 3

写真 4



写真 5



写真 6

日本からは16名 (7K3EOP, JA1BRK, JA1RJU, JF1WMY, JL1XWR, JR1FBE, JA3AER, JE3BEQ, JO3TIC, JK3IYB, JA4DPL, JA5EVQ, JA5TFF, JE5DGG, JA9AG, JA9JYL) の参加とマレーシアに次いで2番目だったが、ブルネイにカウントされたV85NL/ JA4ENL 武政さん、マレーシアにカウントされた9M6KLT/ JA2KLT 丸山さんを含めると、日本人は18名だった。海外11ヶ国からの約90名を含めると、全体で170名近い参加者であった。

この中にはハムではない医師も含め、後に観光などで面倒を見てくれる若いボランティアもかなり含まれていたが、海外からの参加者を含め2006年に大阪で開いたコンベンションに来日された方も沢山おられた。

特別局V84SEAはホテルの最上階 (7階) の大きな一室 (787号室) に設けられていて、FT-950と Hex 5バンド・ビームアンテナの組み合わせで、WARCバンドを含めて14MHzから28MHzまで運用できる状態にあり 例年通り免許を持つ参加者にはゲストオペが許されていた (写真8)。日本からコメントのアンテナ・アナライザ-CAA-500を持参したJA4DPL 吉房さんがアンテナを最適な状態に再調整して喜ばれていた。私は夕刻に時間を見つけてQRVさせて頂きJAの10数局とQSOさせて頂いたが、JA3AA 島さんが呼んで下さりQSO出来たのは幸いだった (写真9)。

受付でのチェックインを終わり、この辺りに郵便局がないかと尋ねると、V85ZX, Nasranさんが連れていくと自分の車で案内してくれた。ホテルの駐車場にはメンバーの多くが車を止めていたが、車にはSEANETのロゴを描いた大きなステッカーが張り付けられているのですぐわかる。郵便局は窓口が4つしかないローカルの郵便局 (Pos Godong) であったが清潔感があり、局員も親切に対応してくれた (写真10)。早速日本から持参した封筒に、買った切手を貼って消印を押して貰った。今回のSEANETコンベンションへの参加記念のカバーが出来上がった (写真11)。

遅い昼食をとろうと約束していたが、郵便局行を優先したので後れをとって Nasranさんに皆はどこへ行ったのだろうと尋ねると、すぐに電話で問い合わせ皆の居場所へ案内してくれた。彼らの組織と連携プレーの良さに感心していると、途中で出あったV85BA, AbuさんがV89MAT, Tajuddinさんを伴って一緒に行くことになった (彼らは日本でのコンベンションにも参加し、その後も毎年会っているので旧知の仲である) (写真12)。Abuさんが、今夜はBDARAの会長V85DX, Sallehさんが自宅へ全員を招待するというので、どんな大きな家なのかと尋ねると、返事は普通の家だとのことだった。食事を済ませてホテルに戻りかけると、そのSallehさんが車を降りて近づいてきた。一緒に居合わせた宮本さんと私を誘い、お茶でも飲もうとホテルの2階に案内された。AbuさんやTajuddinさんも一緒だったが、先ほど昼食を済ませたばかりなのに、このヌードルは美味しいからと勧められてご馳走になった (写真13)。偶然に見えたAbuさんの出現も、Sallehさんの出現も、後から考えると組織的な連携プレーで、SEANETコンベンションを日本に持って行くための段階的な圧力の初期のものだったのかも知れない。



写真 7



写真 8



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15

参加者のほとんどが出そろうこの日の夜は、小型バス4台 (環境に配慮しているのか、この国ではついに大型バスは見かけなかった) に分乗してV85DX, Sallehさんの家に出かけた。普通の家と聞いていたのが (信用はしていなかったが) ゲートに守衛を置くほどの豪邸で驚かされた。玄関で靴を脱ぎ (靴を脱ぐのは日本だけではなく) 通された吹き抜けの広いロビーでお茶やソーダ水 (回教国でお酒がない) の接待を受けながら、訪問者は歓談をした! 写真を撮り合ったりして過ごしていた(写真14)。私がソファに座っているとSallehが友人の横に座ろうと言いながら横にやってきた (写真15)。すぐ横のテーブルに飾られていた若いカップルの写真について尋ねると、この国の王子さんと結婚したお嬢さんの写真とのことであった。また、王室にもハムはいるのかと尋ねてみると、ハムいないが国王 (サルタン) は飛行機を持っておりV8KHBまたはV8HBでQRVしているとのことだった (HBIはHis Majesty Sultan Haji Hassanal Bolkiahのイニシャルと思われる)。一部の人は2階にあるV85DXの無線室に案内されSallehさんが記念にとソーショットの撮影に応じてくれた (写真16)。

食事の用意ができた案内された広いガーデンで、ピュッフスタイルの食事を楽しんでいたが (写真17)、フライトの関係で遅れて着いた韓国からの一行11名が加わり更に賑やかになった (写真18)。庭の片隅には巨大なマルチバンド八木アンテナを乗せた30mもあるかと思われるタワーがそびえていたが、暗闇でカメラのフラッシュが届かないのは残念だった。(次号につづく)



写真 16



写真 18



写真 17

注 :写真はBDARAの他、JA5EVQ, JA4DPL, JE3BEQ, JK3IYB, JO3TIC, JL1XWR, 7K3EOP, HL1KDWから頂いた写真も使用しています。

## 大阪国際交流センター・ラジオクラブ

Roll call 21.370MHz  
0900JST Saturday

**J13ZAG**

Club Meeting  
1800JST on 2nd Friday